

## 子育てで渡る川



幼稚園に出勤をして、事務所にすわっていると、次から次へと色々な相手がやってきます。私の席の机のむこうに椅子があるといたしましょう。そこに「出来事」が座ります。ひょっこりと座ったり、待ちかねていたり、予測通りだったり、まったくの不意打ちであったりと、様々な姿で現れて、私の前に座るのです。私はその出来事に最大最善の一手を打つべく、あい対する席に座っているのです。

楽勝もあれば、惜敗もあります。地団駄ふんで悔しがる事もあれば晴れ晴れと実も心も軽くなる時もありました。勝てば気が済む、負ければ引きずるの繰り返しであったようにも思います。苦しいけれどもやりがいというものが流れていたし、その流れの源には自分に出来る事がどれほどか試してみたいといった気持ちがわいていたようにも思います。それが若さゆえであったのか、そうしたことが必要な時期であったのか、とにかく来る日も来る日も子どもを育てながらこうした仕事でフルタイムワーカーをしている時期の事でしたから、公私にわたり24時間、息をするように片っ端から家でも職場でもとこるかまわず、おこった出来事と対戦するといった生活を送っていたのでした。

私の人生から子どもを大きくするという優先事項が去り、対戦ざんまいの生活に一段落がつきました。あとは人として育つ出来事がおこるたびに、必要な助言をして見守って、離れていてもいつも心は共にある、そんな調子でゆけるでしょう。今になって、小さな子どもを一生懸命に育てている、そんなお母ちゃん達をみていると、私もあなたのようなのだと、それまでではできなかった対応が出来るようにもなりました。勝ち負けではなくて、もっともっといろいろな、たくさんのものごとがひろえて、つながって、腑に落ちて、導かれて導いてゆくことができるようにもなりました。そのときの私は50歳を過ぎていました。長い時間をかけて、様々な出来事を通じて、人は育ってゆくのです。

みくま幼稚園の事務所に座っていると、様々な事情の子ども達がたずねてきます。なかには、面白ければブレーキをかけることができない、楽しければやっていいことも悪い事もわからなくなる、わかってもやめられないなど、ようするに、叱られてジムシヨに連れてこられたという姿の子ども達もやってきます。人が心豊かに生きて暮らしておればおこってゆく様々な、無数にちかい数の出来事がみくま幼稚園の生活のなかでも子ども達の身の上におこってゆくのです。

連れてこられた子ども達には、おこったきっかけや、出来事をおこした目的や、できごとの状況をたずねます。それがみくまルールではどうしたことであるのかをジャッジをしてきかせます。先生達の指導を、子どもが学ぶかどうか、それは生きた本物のルールがそこに流れているかどうかで決まります。ルールに命が宿っているかどうか、それは出来事という鏡を通じて映し出される先生たちの心の底に「子どもに願う姿」があるかどうか、「人として豊かな人生を生きていってほしいとその子の将来を願う姿」それがどうか問われていることなのです。それは必死に子どもを育てているとき、いつもふと思いついたように、気がつけば座っていた机の向こうの相手でもありました。

子どもを育てていると、子どもをよくみても、それは子どもにうつりこんだ自分でもありました。必死に取りすがれる相手は自分自身でもありました。そうやって子どもに育ててもらったのでした。

「園長先生と約束しよう」そう言って差し出した手のひらに子どもがそっと手を重ねる時、願いがかなう、きっと祈りは通じてゆく、お母ちゃんに握りしめられてきた小さな手には、きっとそれらが宿っている。小さな手から伝わってくるその小さな力の源に、確かに触れて、私はそれを信じるのです。